

SYNOPSIS

Hard Times is Charles Dickens's portrait of a Lancashire mill-town in the 1840's. Under the influence of the Industrial Revolution, the population of the North industrial cities increased and various occupations appeared. In order to train technicians who were concerned in new occupations, the attention about education rose rapidly. In such a time as this, it is not too much to say that Hard Times centered round the educational theme.

Dickens described the conflict between 'facts' and 'fancy' both in educational and industrial scenes. Gradgrind, who symbolizes 'facts', tried to educate his children merely by the cramming in of knowledge but only to fail. The failure of his education makes us realize the importance of fostering their imagination for the proper education of children and human well-being.

1 . 19世紀のイギリスの初等教育の実態

『辛い世の中』(Hard Times)は、近代資本主義の発達がいち早くみられた19世紀のイギリス北部の工業都市を舞台として描かれている。ディケンズ(Charles Dickens)の活躍したこの時代は、産業革命の進展に伴い、自然科学の進歩が促され、物質主義的風潮が支配していた。その知的風土の中で活躍したのが、ベンサム(Jeremy Bentham)に代表される功利主義者達である。彼らによれば、社会の利益は、それを構成する個人の利益の総計に等しく、様々な制度・政策は「最大多数の最大幸福」への貢献度で評価される。その思想には、国家による私事への干渉を可能な限り排除しようとする、強烈な個人主義的傾向が見られる。自由と独立独歩の精神を何より重んじたヴィクトリア時代において、個人主義は、自由で独立した個の確立を促すとして、政治的社会的問題を扱う思想に深く浸透していたが、国家による弱者への恒常的援助制度については個の独立心を損なうとして否定的であった¹。この個人主義は常に、弱者に対してより強者に対して多く訴える哲学であった。労働組合の禁止、商業活動への制限が最小限に縮小されるべきだという意見は、工場主にとって有利に働くことは明らかであった²。個人主義を自分に有利に利用する冷酷な工場主バウンダビー(Bounderby)は、最も下劣で野蛮な形の「粗野な個人主義」を体現している人物といえよう³。功利主義は、個性への没頭、情緒の表現、直観を強調するロマン主義とは反対の立場であり、情緒より理性に力点をおく哲学であった。何らかの主義に没頭することは、教養ある人間の判断を曇らせるものと功利主義者達はみなしていたのである⁴。このように何もかも理性でわりきる功利主義者達は、空想もナンセンスだと考える傾向にある⁵。グラッドグラインド(Gradgrind)はこのように彼らの空想を軽視した主知主義的な教育思想に共鳴し、一種のジェイムズ・ミル(James Mill)として、知的確信から、彼が息子に与えたのと同じ英才教育を与える厳格で实际的理論家として描かれている。しかし彼はあくまでも子供達のためになると信じて、善意をもって主知主義教育を推進したのである。

'Mr. Gradgrind, though hard enough, was by no means so rough a man as Mr. Bounderby'⁶

とあるように、ディケンズは、バウンダビーほどグラッドグラインドを悪意をもって描いていないことに注目しておきたい。グラッドグラインドは、サーカス団員の父が蒸発した時、その娘シシィ・ジュープ (Sissy Jupe) をバウンダビーの反対にもかかわらず自宅に引き取って育ててやる。この彼の優しい行為は将来の彼の改心への徴候を示すと、Paul Schlickeは指摘している⁷。

では、グラッドグラインドの学校では、実際にどのような教育が行われているのであろうか。以下のこの物語の冒頭の一節は、彼の経営する学校の教育方針を示している。

'Now, what I want is, Facts. Teach these boys and girls nothing but Facts. Facts alone are wanted in life. Plant nothing else and root out everything else. You can only form the minds of reasoning animals upon Facts: nothing else will ever be of any service to them. This is the principle on which I bring up my own children, and this is the principle on which I bring up these children. Stick to Facts, Sir!'(Book 1, 1, p.1)

彼の学校では知識の獲得が教育の目的とみなされ、運動、芸術、情操などの重要性が全く顧みられなかった。教科そのものは読み方、算数、書き方、宗教などの事実に関する実用的なもので、子供達は将来役に立つ従業員として勤勉で忠実になるように鍛えられた。授業は教義問答のように質問に答える形で行われた。この学校で優等生の称号を与えられているビットァ (Bitzer) は、ウマの定義を尋ねられた時、次のようにすらすらと答える。

'Quadruped. Graminivorous. Forty teeth, namely twenty four grinders, four eye-teeth, and twelve incisive. Sheds coat in the spring; in marshy countries, sheds hoofs, too...(Book1, 2, p.5)

このような言葉は、たいていの子供達にとって理解不能であったが、事物を定義することは当時教師の間では教養の証拠であると信じられていたため、このような授業が行われていたのであった⁸。

『大いなる遺産』 (Great Expectations)にも主人公ピップ (Pip) の通う学校の様子が描かれている。この学校は小間物屋の女主人が2階の一室を教室として開放し、読み書きを教えるという形態をとっていた。18世紀及び19世紀に、婦人によって他の仕事の補足として経営された、幼い子供達のための、このような小規模学校は、「おかみさん学校」 (dame school) と呼

ばれた。国家の管理も受けず運営されている、このような質の悪い私塾には、語るに値する教育設備もなかった。ピップの通う私塾は、小間物屋の女主人が店の仕事の片手間に教師も兼ねていた。教育に関する専門知識もない者が、このように簡単に教育に携わることもあり得たのである。個人主義的風潮が強かった当時においては、教育は私事の問題であるから国家が教育に干渉するべきではない、という考え方が一般的であった。

しかし、産業革命によって急速に社会が変化するのに伴って、道徳の退廃が始まり、社会秩序が乱れてきたため、その対策として国家が青少年に適切な教育を施し、勤勉な生活を送るよう指導する必要が生じて来た。初等教育への直接的な関与が初めて政府によって行われたのは、1830年代、学校建設のために大蔵省の補助金が支出された時である⁹。国家の管理を受ける初等学校において採用された教授法が、助教制度 (monitor system) である。この制度の下では、教師が年長の生徒を「助教」に選び、彼らにのみ先に直接教授し、一般の授業中は助教が担当の生徒集団の教授に責任を負い、教師がそれを監督した¹⁰。この制度は、学校が財政上の理由から、生徒数の急増に見合う数の教師を確保しなかったため、一人の教師が多数の生徒を教えねばならない、という状況の下で生じたものと考えられる。この教授法は、結果的に、生徒に対する知識の機械的な詰め込みと、教師の仕事の単純化をもたらした。

このような状況を打開し、教師の地位と待遇を改善して、教師に優秀な人材を大量に確保するために、ジェイムズ・ケイ・シャトルワース (James Kay-Shuttleworth) が1846年に導入したのが教員見習制度 (pupil-teacher system) である。この制度の下では、少年少女達は、通常13才から教師に徒弟として五年間つかえ、視学官によって行われる年次試験に合格すると、教員見習生には少額の手当が、教師には政府から追加の給料が支払われたのである。正規の課程を終えた教員見習生は、政府発行の免許状をもった有資格教師となった¹¹。『辛い世の中』にはマクチョーカムチャイルド (M'Choakumchild) という有資格教師が登場する。彼が受けた教育がいかに画一的なものであったかが次のように述べられている。

... He and some one hundred and forty other schoolmasters, had been lately turned at the same time, in the same factory, on the same principles, like so many pianoforte legs. He had been put through an immense variety of paces, and had answered volumes of head-breaking questions... (Book 1, 2, p.8)

学ぶべき知識があまりにも膨大で多岐にわたっていたため、師範学校出身の教師は知識の暗記に追われるあまり、能力はあっても、感動、独創性、実験的精神を欠く傾向があった。このようにコークタウンにおいては、

知識偏重の無味乾燥な教育を強いる教師による、まさに機械的教育が子供達に施されていたのであった。'If he had only learnt a little less, how infinitely better he might have taught much more!'(Book 1, 2, p. 8)という言葉は、ディケンズ自身が知識中心の教育を強いる有資格教師に向けて放った痛烈な皮肉なのである。

2. グラッドグラインド家の子供達

グラッドグラインドは、家庭においても事実中心の教育を推し進めるワシントンな父親であった。これに対して母親は病弱であり、彼の教育方針に逆らうことのできない受動的な存在であった。このような家庭においては、想像力を排除し、事実のみを強調する教育方針が、子供達に一層強く影響を与えることは否めない。では、学校と家庭において、二重に事実中心教育を強いられて来た子供達のうち、まず、長女のルイーザ (Louisa) の人生を追ってみよう。

ルイーザはおとなしいが長女としての責任感が強く、芯の強い子供として描かれている。弟トム (Tom) はルイーザのことを次のように観察している。

'...Besides, though Loo is a girl, she's not a common sort of girl. She can shut herself up within herself, and think--as I have often known her sit and watch the fire--for an hour at a stretch.'(Book 11, 3, p.135)

ルイーザは普通の女の子のように、少女時代に歌を歌ったり、絵を描いたり、同年代の友達と遊ぶというような経験をもたなかった。そのかわりに彼女は上述のように火を見つめて内省するという習慣をもっていた。彼女が火を通して何を見つめていたかをルイーザは、第1部8章 Never Wonder という章の中で母親に次のように述べている。

'I was encouraged by nothing, mother, but by looking at the red sparks dropping out of the fire, and whitening and dying. It made me think, after all, how short my life would be, and how little I could hope to do in it.'(Book 1,8,p.54)

赤い炎が床に落ちるのを眺めながら、ルイーザは火花の中に、人生の短さ、即ち死の影を見いだしているのである。わずか十五、六才の若さで、すでに人生を達観したルイーザは、同時に「内面に燃やし尽くせない炎」(a fire with nothing to burn, Book , 3, p.12)を秘めた存在でもある。

本来子供というものは「不思議に思う心」をもっている。ところが不幸なことにグランドグランドは、すべての興味の源泉であり、生産的な仕事を推進する先導役¹²となるはずの不思議に思う心を抑圧する教育方針をモットーとした。しかし、彼が夢や想像のかわりに対置した事実一色の教育方針は決して子供の人生を豊かにはしてくれなかった。いくら不自然に抑圧しても、やはり子供は夢や想像の世界に憧れをもつものなのである。このことはルイーザがトムとともにスリアリー曲馬団(Sleary's Horse-riding)というサーカス団の興業をのぞき穴から眺める、という行動の中に現れている。サーカスは当時の典型的な大衆の娯楽のひとつであった。ディケンズ自身も 'There is no place which recalls so strongly our recollections of childhood as Astley's'¹³ というように『ボズのスケッチ集』(Sketches by Boz)の中で述べているが、彼自身の幸福な少年時代と、アストレイサーカス団を結び付けて思い出している。ディケンズも親しんだアストレイサーカスは、当時イギリスでは最も有名なサーカス団であり、宙返りや綱渡りなどの人間技や動物による曲芸、喜劇的な寸劇などで人気を博していた¹⁴。特に集団や単独での馬による曲芸はディケンズの時代のサーカスの最大の呼び物であり、このことは『辛い世の中』におけるスリアリー曲馬団での馬の役割の重要性にも踏襲されている。

この小説の舞台となるコークタウンでは、労働者の毎日は単純作業の連続であり、彼らはまるで工場の機械の歯車の一部として働かねばならなかった。このような彼らにとって、一瞬でも現実を忘れさせてくれ、夢や希望を与え、想像力を刺激する重要な役割を果たしたのがサーカスであった。サーカスは非人情で殺伐とした人間社会を描いた『辛い世の中』において、想像力を体現しているのである。ディケンズはコークタウンの事実一辺倒の世界と人間味あふれるサーカスの世界を対比している。これは、もし人間社会に本当に必要とされるもの - つまり想像力 - を大事にしなければ、社会全体にも子供達にも歪みが生じてしまう¹⁵、という道徳的寓意を鮮明にするためである、と考えられよう。

詩やおとぎ話と同じく、想像力の同義語であるサーカスを敵対視するグラッドグラインドは、自分の子供達がサーカスを覗き込んでいる様子を見て愕然とし、子供達を厳しく叱責する。父親によって、想像力の世界へ通じる覗き穴をふさがれてしまったルイーザは、父親に対して反抗的な態度をとり、すねた様子を見せ、'I was tired, father, I have been tired a long time.' (Book , 3, p.13) という十五、六才の娘に似つかわしくない言葉を吐き、父親を驚かせる。ルイーザのこのなげやりな態度は、結婚という重大事を決める際にも現れる。ルイーザは父親から父の友人であるバウンダビーとの結婚を勧められるのである。自分と同年代の男性との結婚を本気で考える父親に対して絶望したルイーザは、'What does it matter?' (Book , 15, p.100) という心境に陥り、自暴自棄になって、ついにはバウンダビーとの結婚を承諾してしまう。

ルイーザがバウンダビーに対して愛情どころか嫌悪感さえ抱いている様子は、グラッドグラインド家を訪れたバウンダビーが帰る際、「別れのキスをされた頬を赤くなるまでこすり続ける」 (...rubbing the cheek he had kissed, with her handkerchief, until it was burning red. [Book , 4, p.21]) という行為にも示されている。ルイーザがこのように嫌悪感さえ抱いている男性を人生の伴侶に選んだ大きな理由は、弟トムへの愛情である。もし自分がバウンダビーと結婚すれば、トムがバウンダビーの銀行に就職できるとルイーザは考えたわけである。弟への愛情はルイーザにとって、「自分の人生を生きるに値するものとする唯一の積極的な感情」¹⁶といえるのである。

しかしルイーザとバウンダビーとの愛のない結婚生活は長くは続かない。ジェームズ・ハートハウス (James Harthouse) という男がルイーザを誘惑しようとする近づき、ルイーザは彼の誘惑の手から逃れるために父親のもとに庇護を求めるのである。

これまでは自分の内面から湧きあがる感情を抑圧し続けてきたルイーザが、はじめて自分の心情を父にむかって吐露する。

'...All that I know is, your philosophy and your teaching will not save me. Now, father, you have brought me to this. Save me by some other means!' He tightened his hold in time to prevent her sinking on the floor, but she cried out in a terrible voice, 'I shall die if you hold me! Let me fall upon the ground!' And he laid her down there, and saw the pride of his heart and the triumph of his system, lying, an insensible heap, at his feet.(Book , 12, p.219)

グラッドグラインドは自分の娘が足元に崩れ去るのを見ながら、彼の人生哲学であった事実中心主義の教育方針の崩壊を見るのであった。第1部1章の章題 'The One Thing Needful' は、ルカによる福音書からの引用であるが、ここでは事実を示唆しているのに対して、第3部1章の章題 'Another Thing Needful' は、ルイーザが別の方法で救い出してほしいと懇願したもの、すなわち空想を意味している。グラッドグラインドは娘によって空想の重要性を認識させられ、同時に彼自身の内面にも変化が生じ改心に至るのであった。このことは彼がバウンダビーとは異なり、あがなわれるべき存在¹⁷であることを示しているのである。父親に改心を促すきっかけとなったルイーザは、この後は父のもとで、残りの人生を善行に費やししながら静かに送ることになる。

ルイーザの弟トムは、姉と同じく人生に失望しており、表面的には父への反抗心は見せないが、心の中では父から受けてきた教育に対して強い不満をもっており、父には復讐の念さえ抱いている。父への反発心から、なんとか家を出たいと願っているトムは、バウンダビーの銀行への就職を希望している。バウンダビーの姉への執着ぶりを知っているトムは、姉とバウンダビーの結婚を通して自分の夢をかなえたいと思っている。トムは「できるだけ安く買い取り高く売り付ける」(to be purchaseable in the cheapest market and saleable in the dearest [Book , 5, p.23]) という事実に基づいた効率的な方法、つまり姉の自分への愛情を利用して自分をバウンダビーに売り込むというやりかたで、銀行への就職を実現させようとしたわけである。ルイーザと同じく想像力を不自然に抑圧されて育った結果、トムは自分の利益のためには、姉の人生を犠牲にしてもよいという、自己本位で卑しい人間になってしまう。ディケンズは皮肉をこめてトムのことを 'hypocrite' (Book , 3, p.132) としてとらえ、「ろくでなし」という意味の 'whelp' (Book , 3, p.132) という異名をも与えている。

このようにトムは、極めて自分本位な人物であると同時に想像力の世界とは無縁な人物として描かれている。トムは姉のおかげで首尾よくバウンダビーの銀行に就職できるが、次々と借金を重ねるような自堕落な生活を始める。ある日トムは、姉を誘惑するために接近してきたハートハウスに、借金に困っていることを打ち明ける。この時トムは絶望した状態で、ばら園に座り込み、半泣きになりながら、ばらの蕾を摘んでは撒き散らし、「想像力の重要なイメージの一つである花」¹⁸を台無しにしてしまう。このエピソードはトムが自分自身の手で自らを想像力と無縁の世界に置いたことを意味している。自分自身で想像力を握り潰してしまった結果、墮落してしまう典型的な例としてトムは描かれているのである。

想像力とは無縁の世界の人間であり、しかも極めて利己主義的な人間であるトムは、やがて犯罪の世界に足を踏み入れて行くことになる。トムのような利己主義を貫く人間を考える時に思い出すのは、『オリバー・ツイスト』(Oliver Twist)において、盗賊団の首領フェイギン(Fagin)が掲げたナンバーワン哲学である。自分の利益を守るためには他人を犠牲にしても構わないというフェイギンの哲学は、姉の人生を犠牲にして自己の利益を優先したトムの生き方とオーバーラップするのである。実際トムはバウンダビーの銀行強盗をし、その濡れ衣を誠実な労働者スティーブン・ブラックプール(Stephen Blackpool)に着せるという卑劣な犯罪と結び付いて行くことになる。

グラッドグラインドはトムを立派に育て上げるために事実中心主義教育を施すのであるが、結局はトムに裏切られるという皮肉な結果を生む。F.R. Leavisも指摘するように、まさにトムは'sardonic comedy'¹⁹の中心人物といえるであろう。

ルイーザとトム的人生をたどっていくことにより、想像力の芽を摘み取り、知識のみを詰め込む事実中心主義の教育を強いることが、いかに彼らの人生を破滅的なものとするかを具体的に見て来た。人生に自暴自棄になり、結婚相手の選択を誤ったルイーザには、ヴィクトリア時代の理想の女性像である良妻賢母になる機会はずいに与えられない。トムに至っては、「自己本位、好色、犯罪の怪物」²⁰となりさがってしまう。ディケンズは『辛い世の中』の副題として、sowing, reaping, garnering という言葉をマタイの福音書の中の「種蒔きのたとえ」から選んだ。「良い土壌に蒔いた種でなければ、良い実を結ばない」というこれらの言葉が示す教訓を、ディケンズはトムとルイーザの人生を通して具体的に我々に知らしめている、といえないであろうか。

3. ビツァとシシィ

グランドグランド家の子供達以外に、この小説にはグランドグランドの経営する学校に通う、ビツァとシシィという2人の子供が登場する。

ビツァは、シシィが答えられなかった馬の定義をすらすらと答える優等生であり、学校の機械的な教育にもよく順応している。ビツァは、学校では劣等生であり想像力の世界の住人であるシシィとは全く対照的に描かれている。次の叙述は、同じ太陽光線をあびても、シシィは光り輝く明るい存在であるのに対して、ビツァは、光そのものが彼から引き出されて行くような暗い存在として描かれていることを示している。

But, whereas the girl was so dark-eyed and dark-haired, that she seemed to receive a deeper and more lustrous colour from the sun, when it shone upon her, the boy was so light-eyed and light-haired that the self-same rays appeared to draw out of him what little colour he ever possessed.

(Book , 2, pp.4-5)

いわば、陽と陰、光と闇のような対照的な存在である2人は、後にグランドグランドにも、彼の子供達にもやはり対照的な役割を果たす点に注目しておきたい。

ビツァは学校卒業後、トムと同じくバウンダビーの銀行へ就職する。ビツァはグランドグランドの薫陶をうけただけあって、いかなる場合も理性を失わず、安く買い取って高く売り付けるという効率の良いやり方を身につけることが、人間の一部分ではなく、すべてであると信じている。ビツァはバウンダビーの銀行強盗の真犯人がトムであることをつきとめると、トムの隠れているスリアリー曲馬団の興業先まで彼を追い詰める。そして、彼はかつての恩師であるグランドグランドに向かって次のよう

に言う。

'...but I am sure you know that the whole social system is a question of self-interest. What you must always appeal to, is a person's self-interest. It's your only hold. We are so constituted. I was brought up in that catechism when I was very young, Sir, as you are aware.' (Book 8, p.288)

トムをなんとか逃亡させてやりたいというグラッドグラインドの願いも、常に感情にながされず理性に忠実に行動するピッツァには届かない。銀行強盗の真犯人を捕らえて、手柄を立て、バウンダビーの経営する銀行における自分の地位を上げることが当面の目標とするピッツァにとっては、グラッドグラインドの懇願に耳を貸す余地はない。グラッドグラインドはもはや過去の恩師であり、今はバウンダビーの信用を得て彼に取り立ててもらったことこそが、ピッツァの最大の関心事なのだ。'My schooling was paid for it; it was a bargain; and when I came away, the bargain ended.' (Book 8, p.288) というピッツァの言葉には、損得勘定のみで物事を割り切り、人間関係さえも商売上の取引と同じように考える冷酷な人間性があらわれている。想像力のもうひとつの象徴である馬の出現によって最後はトムを取り逃がしてしまうが、ピッツァはバウンダビーの信望を得ることには成功する。結局グラッドグラインドは、最も信頼をおき、自分の教育方針を忠実に実践してきたピッツァにまで裏切られることになる。最終的にグラッドグラインドを裏切るという点でも、自分の利益を第一に考えて都合よく立ち回る卑劣漢として描かれている点でも、ピッツァはトムと非常に共通点の多い存在なのである。

あらゆる点でピッツァと対極的な立場にあるシシィ・ジューブには、F.R. Leavis も着目しているように、想像力の体現者という象徴的意義が備わっている²¹。シシィはルイーザ、トム、ピッツァと違って、スリアリー曲馬団に属する父親が蒸発してしまうまでは、愛犬や父親と共に、幸せな幼年時代を送ることができた。シシィは曲馬団の中では、自由で幸福であり、想像力を働かせることも許されていた。また父親の愛情に包まれ、動物をかわいがり、曲馬団の仲間に奉仕する機会にも恵まれていた。やがてシシィには、曲馬団の中で培われてきた真のキリスト教的人格²²を、他人の幸福と利益のために役立たせる機会が訪れる事になる。父の蒸発後、シシィはグラッドグラインドの好意で彼の手元に引き取られ、教育を受けることになる。シシィは学校では暗記もできず、計算能力もないので、グラッドグラインドの失望を買う。彼は、事実の蓄積こそ教育の成果であると信じ、シシィが愛らしく善良な娘であることなどは、取るに足りないことだと考えている。

しかし、学校では劣等生であるシシィが、グラッドグラインド家で果た

す役割は極めて大きい。グラッドグラインドには5人の子供がいるが、母親が病弱なため、シシィは家政婦として母親を助け、下の子供達の相談相手となるのである。シシィはルイーザやトムが持てなかった、自由と想像力に満ちた子供時代を下の子供達に与えてやることが出来た。ルイーザの妹ジェイン (Jane) は、シシィの影響をうけて、素直で従順な少女に育って行く。シシィは文字通りグラッドグラインド家の善き天使となり、明るく家全体を照らし始める。

また、シシィは下の子供達にとってだけでなく、ルイーザやトムにも重要な役割を果たしている。例えば、ルイーザがハートハウスの誘惑の手から逃れるために父の元へ戻ったとき、シシィはハートハウスの元へ出向いて、ルイーザは彼に二度と会うつもりはない旨を告げる。シシィのあまりにも真摯な態度に、ハートハウスはついにルイーザから手を引くことを承諾する。また、トムが銀行強盗の真犯人である、と分かったとき、シシィは、スリアリー曲馬団の元へ彼を匿うために奔走し、トムの逃亡の手助けをする。

以上のようにシシィは、身寄りのない自分を引き取って育ててくれたグラッドグラインドに恩義を感じ、それに十分報いていると言える。John Butt と Kathleen Tillotson は、彼がシシィから受けた報いについて次のように述べている。

Besides, Gradgrind in his unreformed days had taken pity upon Sissy and now he is to garner the reward which, by her presence in his house, he had already begun to reap.²³

このように、想像力という象徴的意義をになったシシィは、結婚して子供に恵まれるという女性としての幸せを手に入れることが出来る。この作品の最終場面で、事実一点ばりの工業社会においては、空想を軽視すべきでなく、想像力の恩恵で、世の中を美化して行くことが必要だという次のようなシシィの訴えを聞くことができる。

'...thinking no innocent and pretty fancy ever to be despised; trying hard to know her humbler fellow-creatures, and to beautify their lives of machinery and reality with those imaginative graces and delights; without which the heart of infancy will wither up, the sturdiest physical manhood will be morally stark death, and the plainest national prosperity figures can show, will be the Writing on the Wall, ...' (Book , 8, p.299)

4 . 教育に本当に必要なもの

以上4人の子供達の人生を概観することによって、幸福な人生を歩むためには子供時代に豊かな想像力や情感を身につけることが最も重要だ、とディケンズが信じていることが次第に明らかになって来た。このことは同時にヴィクトリア時代の中心的思想である功利主義哲学のどの点にディケンズが批判的であったのかを知る手懸かりにもなるのである。

この当時の功利主義哲学の代表的思想家といえ、イギリスの革新の父といわれるベンサムであろう。法律関係の職業についていたベンサムは、イギリスの法律が弊害にみちていることを発見し、イギリス法に対して先人もなしえなかった批判をし、倫理学と政治学の中に、科学には必須の習慣と研究方法を導入した人であった。彼は当然有害と思われる行為も論証なしでは自明の事とはせず、何事に対しても正式に立証するという労を惜しまなかったのである。道徳的基準として功利性に基礎を置く彼の思索方法は、社会の中でも実務的部分、即ち経済面や法律面の問題を扱うにはきわめて有効であり、この分野で彼が成し遂げた功績は偉大なものであったのは確かである²⁴。

しかし、ベンサムは静かで平凡な人生を歩み、ごくわずかな人生経験しか持たなかったために、人間性や人間の諸感情について深く考える機会がなかった。また彼は想像力を欠いていたために、絵画、音楽、詩歌など想像力がもたらす芸術が、いかに人間の道徳感に浸透し、個人や民衆の教育に深く関与するかに気付くこともなかった。特に人間の感情を誇張して表現する詩歌に関しては「すべての詩歌は虚偽の叙述である」²⁵と信じて疑わなかった。彼の詩歌を軽蔑する態度は、子供達から殊更に詩歌を遠ざけようとするグラッドグラインドの教育方針といみじくも一致している。

一方ベンサムとは反対に、ディケンズは波乱万丈の人生を送り、人間性やそこから生じる諸感情への観察力が人一倍鋭い作家であった。従って、ディケンズは、ベンサムが人類全体の幸福や利益を考えるあまりに、一個人の人間性について注意を払わなかった点や想像力の重要性を顧みなかった点について、批判的態度を取ったのであろう。ディケンズは複雑な人間性をも経済や法律を計るのと同じ功利性のものさしで計ることは、不可能であることに気付いていたのである。

功利主義の主知主義的教育方針の代わりにディケンズが対置したのは 'the education of heart'²⁶ であった。そして、このような教育に不可欠なのは愛情あふれる幸せな家庭である。シシィの幸福な晩年は、父親の愛情につつまれた幸せな幼年時代という基盤があったからこそ成り立ったといえる。

『辛い世の中』におけるディケンズの理想の集団は、愛情にあふれ、仕事に誇りを持って生きるスリアリー曲馬団の芸人達である。この曲馬団の団長スリアリーは、シシィと同じく想像力を体現しており、グラッドグラインドの事実信奉主義の哲学とは対照的な独自の哲学を持っている。スリアリーがグラッドグラインドに語った次の言葉の中にはコークタウンの毎日の機械的労働にこそ娯楽が必要だということが述べられている。

'...People must be amused. They can't be always a learning, nor yet they can't always a working, they aren't made for it. You must have both, Thquire. Do the wretched thing and the kind thing too, and make the best of both; not the worst!' (Book 8, p.293)

一見教育とは無関係に見えるこの言葉は、実際は教育と密接なつながりを持つ。なぜなら、コークタウンの労働者の状況と、グラッドグラインド家の子供達の置かれた状況は、どちらも娯楽や気晴らしを排除された生活を強いられている点で、きわめて類似しているからである。従って、労働者達の単純労働に娯楽が渴望されるのと同じく、子供達にも空想や情緒を重視した教育が施される必要がある。『辛い世の中』に描かれているような閉塞の時代においてこそ、本当に必要なものは愛や人情である。そして、それを育む教育は、事実だけが支配する環境の中で行われるべきではなく、想像力を正しく育成できる場においてなされる必要がある、ということディケンズは子供達の生き方を通して示唆しているのである。

注

本稿は、甲南英文学会第11回研究発表会（於甲南大学、1995年7月1日）での発表草稿を加筆訂正したものである。

1. D. ウォードル著、岩本俊郎訳『イギリス民衆教育の展開』（東京：共同出版,1979）14.
2. ウォードル, 31.
3. J. S. ミル著, 松本啓訳『ベンサムとコールリッジ / F. R. リーヴィス序文』（東京：みすず書房, 1990）46.
4. ウォードル, 16.
5. G.K.Chesterton, Criticisms & Appreciations of the Works of Charles Dickens (London: J.M.Dent & Co., 1992) 174.
6. Charles Dickens, Hard Times (Oxford: Oxford UP, 1987) 27
以下、テキストの章と、ページ数は、本文中の括弧内に示す。
7. Paul Schlicke, Dickens and Popular Entertainment (London: Unwin Hyman Ltd., 1988) 172.
8. フィリップ・コリンズ著、藤村公輝訳『ディケンズと教育』（東京：山口書店, 1990）309.
9. ウォードル, 34.
10. ウォードル, 131.
11. Neil J.Smelser, Social Paralysis and Social Change: British Working-Class Education in the Nineteenth Century (Los Angeles: University of California press, 1991) 300.
12. J. L. ヒューズ著, 藤村公輝訳『教育者ディケンズ』（東京：青山社, 1994）168.
13. Charles Dickens, Sketches By Boz (Oxford: Oxford UP,1991) 104.
14. Schlicke, 150.
15. Schlicke, 177.
16. Michael Slater, Dickens and Women (London: J.M.Dent & Sons Ltd., 1986) 264.
17. John Butt and Kathleen Tillotson, Dickens at Work (London: Methuen & Co. Ltd., 1968) 209.
18. コリンズ, 314.
19. F.R. Leavis, The Great Tradition (London: Chatto & Windus, 1955) 240.
20. ヒューズ, 79.
21. Leavis, 231.

- 22.ヒューズ, 179.
- 23.Butt and Tillotson, 220.
- 24.ミル, 97.
- 25.ミル, 123.
- 26.Butt and Tillotson, 212.

